

定年を迎える先生からのメッセージ



薬学部
教授

岡崎 克則

「北海道医療大学での19年間を振り返って」

2005年2月、一面の雪野原の中ディーゼル列車に乗り来学。当時の廣重学長、黒澤薬学部長・和田教務部長の面接を受け、お昼時となる。20周年記念会館のカレーがやけに黄色く、殆ど味がしなかったことを記憶している。

2009年春、ブタに由来する新型H1N1インフルエンザウイルス(H1N1pdm)が出現。瞬く間に世界中に拡散し、パンデミックが宣言される。6月には札幌でも患者が報告され、本学内科クリニックにおいてもA型インフルエンザ患者を確認。かねてより歯学部内科学教室の家子先生にお願いしてあった通り、患者の鼻水を頂戴。分離ウイルスの遺伝子を解析したところ、H1N1pdm。秋には臨床福祉学科及び薬学科で学年閉鎖。得られた70株余りのウイルスの解析結果をPhylogenetic analysis of pandemic influenza A (H1N1) virus in university students at Tobetsu, Hokkaido, Japan (Microbiol. Immunol., 2012)に発表。表題のミソは、言うまでもなく「当別の大学生」である。

2011年3月、東日本大震災発生。丁度、卒業式に訪れていた大学時代の友人と話している間に長い揺れ。教室所属学生の実家にも大きな被害あり。

2013年、中央講義棟竣工。当初は、ほぼ薬学部専用で3階建て。講義が随分やりやすくなった。しかし、本当に10階建てになるとは!

2018年の北海道胆振東部地震では全道がブラックアウト。ドライアイスを大量に買い込み、ディープフリーザーに投入。凍結していた細胞、ウイルスは事なきを得た。

2020年、新型コロナウイルスによるパンデミック発生。5月半ばからの無人講義室での講義。翌年、志村けんが亡くなったのはショックであった。一方、不謹慎ながらウイルス屋としては心躍る面も。NHKデビュー、道新夕刊のトップ掲載などを経験する。

2023年1月、大雪のためJR、国道275号線がストップし、陸の孤島と化す。非常食と毛布が支給され、大学泊。徹夜予定の学生が登校できず、2回のサンプリングを代行する。

同年9月、北広島キャンパス増設決定。実験室が随分小さくなるらしい。学生は確保しやすくなるだろうが、研究活動にも一層注力し、本学が益々発展することを祈念。

多くの方々に支えられ、大過なく19年間を勤めることができた。心から感謝いたします。



歯学部
教授

古市 保志

「本学着任後の年月を振り返って」

2004年12月に本学歯学部歯科保存学第一講座(現、咬合修復・再建学系 歯周歯内治療学分野)教授に着任して19年の月日が経過しました。私は鹿児島出身で前任地の鹿児島からの着任でしたがスウェーデンへの滞在経験があったので冬の寒さはそれほど気になりませんでした。反面、北海道の雪の多さに圧倒され、JRで石狩川を越えたあたりから車窓に広がる真っ白な雪原と遠方に見える雄大な大雪連山、そして時折舞うダイヤモンドダストに感激したことを覚えています。その後は新緑が芽吹く春先、梅雨とは無縁の初夏、快適な夏、そして紅葉の映える秋を満喫しながら、月日を過ごしてきました。医療系総合大学の1構成員である本学歯学部、特に臨床系分野所属の教員には、教育・臨床・研究を総合的に遂行することが求められています。分野の主任教授であると同時に2009年～2019年は北海道医療大学医科歯科クリニック(現、歯科クリニック)院長、2019年から2024年には歯

学部長を拝命し、その責務を全うすべく試行錯誤の繰り返してした。特に近年のコロナ禍では、通常業務に加えて関連する感染対策、講義・実習様式および日程の調整等、種々の対応に追われ、気が付いたら今年度になっていたという感も否めません。とは言え、19年間に多くのことを学び、経験させていただきました。至らぬところも多々あったと思いますが、これもひとえに、これまでお世話になりました諸氏によるご指導、ご鞭撻の賜物と心から御礼申し上げます。超高齢社会における18歳人口の減少とそれを取り巻く社会の多様化が進んだ現在、医療や大学の在り方にも大きな変革が求められているようです。2028年4月に予定されている本学の北広島市へのキャンパス増設も踏まえ、これからも選ばれる大学そして歯学部としての北海道医療大学および北海道医療大学歯学部の益々の発展を祈念致します。

With heartfelt thanks.



歯学部
教授

中山 英二

「定年退職にあたって」

2007年7月から本学歯学部歯科放射線学分野教授として赴任しました。2024年3月をもちまして定年退職いたします。この間お世話になりました教職員の皆様、本学関係者の皆様、学生の方々に深く御礼申し上げます。

わたしの出身は大分県杵築市という田舎です。1年の浪人後に九州大学歯学部に入學し、全学のワンダーフォーゲル部に属して学生生活を謳歌しました。学生のころ、恩師の神田重信先生（現名誉教授）が「歯学の総合画像診断を目指す」と力強く宣言されたのに感銘を受け、卒業後は歯学部歯科放射線学教室に入局しました。一時期は山梨医科大学（現山梨大学）医学部歯科口腔外科にも在籍し、口腔外科の基礎を学びました。「画像診断」が大好きで、臨床とその教育に没頭していましたが、研究者としてはさしたる成果も出ずに過ごしていました。しかし、たまたま初めて投稿した英語論文が受理され雑誌に掲載されました。すると、知らない国外の研究者から論文の別刷りを求められ、やっと英語論文で研究成果を公開する喜びに目覚めました。その後ははまはま英語論文を発表できるようになりました。その後、准教授まで務め、そ

の間はHarvard大学関連のEye and Ear Infirmaryに文科省在外研究員として短期留学もしました。

その後、2007年に北海道医療大学に赴任しましたが、見知らぬ土地で不安がありました。しかし、妻が毎日手弁当を休まず作ってくれて、それが励みとなりました。妻と子供たちに感謝します。

また、周囲に「杵築市」など知った人はいないと思っていましたが、歯学部同窓会誌の記事で出身地を記載したところ、すぐさま歯学部1期生から同郷（小中学校が同じ）である旨のメールをいただき、非常に嬉しく、不安が和らぎました。また、ある課長も実は同郷（同じ市内）であることもわかり、心強く思ったものでした。

さて、在職中は自慢できる大きな成果も上がりませんが、教育には力を入れてまいりました。そのなかで、卒業試験問題がよく国家試験問題と類似すると言われ、30期卒業生から医療大初の「連続的中賞の殿堂入り教授」の認定を頂きました。これだけは私の誇りです。

最後に、歯学部をはじめとする北海道医療大学のますますのご発展を祈念致します。有難うございました。



歯学部
教授

奥村 一彦

1987（昭和62）年の4月より本学歯学部の教員に採用され、今年2024（令和6）年3月で退職を迎えました。37年間の長きにわたる大学教員生活を無事に納めることができましたのも、大学事務をはじめとするたくさんの教職員の皆様に助けていただいた結果と存じます。あらためて、感謝を申し上げます。

私は、助手の採用を出発点に、講師、准教授、教授を拝命いたしましたので、常に教育現場で育成されました。それと、同時に口腔外科臨床においても、旧口腔外科第1講座教授でありました、故金澤正昭先生に師事し技術をはじめとした小手術や、口腔癌手術、顎変形症等を通じて、幅広い臨床での手技を学びました。このことは、教育の現場でも活かすことができました。

本学の立地条件は、学生にとっては自然環境抜群の中で学びを深くさせることができ、私たち臨床分野においては、当別町を中心に患者様にお越しいただき、近年では参加型臨床実習に快く協力して下さって学生と共に教員もたくさんの学びをさせていただいたことに感謝申し上げます。

とても嬉しく思うことは、こうやって当別町の町民の方から協力をいただいた結果、本学を卒業し立派な歯科医師と

なった卒業生をたくさん送ることができたことです。何編もの学術論文を生産することより価値があると確信しています。

さて、退職後を現時点で想像すると、不安もある一方、何か新鮮な世界に歩みを進めることに期待が膨らむ一面もあります。これからは、自分も含めて高齢化社会の中で生きていかなければなりません。私の父親は開業医の2代目で、子供の時にみていた父親は遅くまで診療をしていた記憶があります。当然、子供達の夕飯は遅くなり、出てくるおかずは、いつも酒の肴でした。その時は、オムレツやハンバーグが良いのにとうらやみもしました。しかし、年齢を重ねると父親そっくりの晩酌人間となってしまいました。そこで、高齢化とどんな繋がり？と思われるかもしれません。実は、日々心も体も健康でない、お酒は美味しくいただけないということです。ですので、高齢者の方々に口から美味しいものをいただけるよう口腔管理のお手伝いをしたいな…、歯科医師人生まだリタイアせず、日々精進したいと思っております。

最後になりましたが、北海道医療大学の6学部9学科で多職種連携によって北海道の医療を支えていただき、本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。



看護福祉学部
講師
遠藤 紀美恵

新型コロナウイルス感染症が第5類となり日常生活の制限が少しずつ緩和され、元の生活に戻つつある中、元日には能登地震が発生。お亡くなりになった方、被害を受けられた方、今なおご不自由な避難生活を送られている多くの方に心からお見舞い申し上げます。

定年を迎えるにあたり教員生活について振り返ってみたいと思います。私が看護教育と関わるようになった経緯は、看護師として4年目を迎え、仕事にも慣れてきたころ。「看護の専門性とは」、私が日々行っていることは「看護なの?」という疑問が湧いてきました。そんな時、北海道が主催している看護教員養成講習会に参加する機会を得ました。

講習会には、全国から50人ほどの現役の看護教員やこれから看護教員になる方が参加し、5月から10月の6ヶ月間に看護や教育課程、学校運営、実習指導、教育学などの講義を受けました。私は看護の専門性や教育の事もあまり良く分からないまま終了いたしました。終了後は苫小牧市立病院附属看護学校、次に札幌医療福祉専門学校、そして平成16年に専門学校の閉校を機に大学に就職いたしました。大学は基本的に個人で教育と研究活動を行なうところ、1年目の私

は時間を余しており、時間潰しに大学構内を探検していました。この体験はオープンキャンパス時に大変に役立ちました。

実習指導や卒研ゼミを通し、学生から看護の感動を頂きました。また実習指導では、砂川、岩見沢、江別、苫小牧と地方の担当が多く、母性看護学の実習は1月から3月初めまでの冬季間のため、まだ薄暗い朝に電車で出かけ暗くなって帰宅する毎日でした。砂川市立病院での実習中、ここ数年は度々あることですが大雪でJRが運休し帰宅できず、学生と宿泊先を探し、やっと一軒の下宿を見つけて砂川に一泊したこともあり、冬季間の実習には苦労いたしました。今は楽しい思い出です。卒業生たちが看護職として活躍されている様子や親になり育てに頑張っている様子をお聞きし嬉しく思います。

学科会議の着任挨拶では、緊張で頭が真っ白になり「ビールが大好きです」と失言を発してしまいました。その後も数々の失言を発してきた私を優しく見守って下さった看護学科教員の皆様には大変に感謝しております。皆様のご配慮の元で楽しく仕事をすることができました。ありがとうございます。

最後に皆様の益々のご活躍と北海道医療大学のご発展を御祈り申し上げます。



看護福祉学部
教授
濱田 淳一

「雑感:定年退職」

とうとう、この日がやってきました。達成感とか、65歳までよくがんばったな感はありません。どちらかという寂寥感というか、まだまだやれますよ的な気持ちの方が勝っているでしょうか。

北海道に憧れて高校卒業と同時に、希望に胸膨らませて津軽海峡を渡ってきたのを昨日のように思い出します。思い描いていたとおり、自然は雄大で魅力にあふれ、そして新生活は新鮮で、自由で、刺激的で、たちまち北海道の虜になってしまいました。以来、米国留学の3年間を除けば、44年間この北の大地に根を下ろし生活してきたこととなります。8年前に小林正伸先生(当時看護福祉学部教授)から「こんなあるよ(教授公募の案内)」とお知らせいただいたのがきっかけとなり、医療大でお世話になることになりました。それまでは、がん細胞と担当がんマウスに囲まれて、「わかってないことを誰よりも早くわかってやろう」とがん転移の研究に没頭していました。医療大の門をくぐってからは、「わかっていることをわかってもらう」という方角にコンパスを合わせ歩を進めることになりました。最初の1年間は講義の準備にとてもご舞いでしたが、これが全く苦にならず、実に楽しい作業なんですよ!講義に使っている解剖学、

生理学、病理学の教科書などを読んで、「どうして?」とか「ほんとう?」などと思うことがあると、とことん調べたくなるわけです。そして、「おー、なるほどね!」とか「ヒトの体は奥が深いな!」と思わず唸ってしまう事実と遭遇することがままあります。これが快感で、やめられませんね!また、講義後に学生さんから予期せぬ質問を浴びせられることがあります。私のこれまでの人生で考えつかなかったことを、たかだか80分の講義中に思い浮かべるわけですから、学生さんの発想力には思わず頬がゆるんでしまいます。ちなみに、最も印象に残っている質問は、「受精しなかった精子は卵管采を突っ切って腹腔内に入るのですか」と「母体に生じたがんが胎児に転移することはあるのですか」のふたつです。みなさまならどのように回答されますか。このように講義は準備も含めて、私の知的好奇心をくすぐる絶好の機会となっており、できることならまだまだ続けていきたいものです。

最後に、この8年間、病気もせず、事故にも遭わず、好き勝手な学生生活を送ることができたのも、ひとえに医療大教職員のみなさまのご協力と心配りのおかげと感謝しております。みなさまの健康とますますのご活躍をお祈りし、筆をおきたいと思ひます。

以上の諸先生のほか、
薬学部 遠藤 泰 教授、吉田 栄一 教授、
歯学部 水谷 博幸 講師、
看護福祉学部 薄井 明 教授が
定年を迎えられます。ありがとうございました。



薬学部
教授
遠藤 泰



薬学部
教授
吉田 栄一



歯学部
講師
水谷 博幸



看護福祉学部
教授
薄井 明